

岩手県立大学の基盤教育における英語教育改革と新英語カリキュラム - その成果と課題についての考察 -

高橋英也（高等教育推進センター・准教授）、渡部芳栄（同・准教授）、
ルプシャ・コルネリア（同・准教授）、佐々智将（同・准教授）、江村健介（同・助教）

<要旨>

本研究は、平成 25 年度からの英語教育改革事業の一環として平成 27 年度にスタートした、新英語カリキュラムについて、その教育効果の検証を行い、同時に、残された課題を明らかにすることを目的として実施された。具体的には、当該事業において導入され、新たな英語基礎科目として位置づけられた「英語基礎演習（完全自習型 e-learning 科目も含む）」「英語実践演習」、そして自由聴講科目ではある「応用英語 II」において、学修目標に応じて科目を分化させたシステムが、どのように運用され、受講生の到達度や学習目標、また、その背後にある学習意欲などの側面において、どのような「変化」をもたらしたかについて、可能な限り可視化することを目指した。

1 研究の概要

研究の実施にあたっては、新英語カリキュラムの科目構成に鑑みて、A. 統一シラバスで実施され、成績評価の一部に学期末 TOEC Bridge を用いる、1 年次履修の「英語基礎演習 I, II」、B. 完全自習型 e-learning 科目であり、やはり成績評価の一部に TOEIC L&R を用いる「英語基礎演習 III, IV」、そして、C. 米国への語学研修である「応用英語」という、科目単位で、実施の概要と成果、課題について検討を行った。

2 研究の内容

課題 A（担当：高橋）では、平成 27 年度入学生を対象に、入学時と各期末に実施の Bridge のスコアを検討した。その結果、(i) 後期でスコアが若干微減したが、全国における「専攻別平均スコア」と比較すると、全ての学部で平均を上回った。(ii) Bridge の測定誤差が、±8 点であり、10 点以上上下で明確な学力変化が確認される点を踏まえると、前期間では、±8 点以内が 59%、+10 点以上が 35%であり、後期間では、それぞれ 69%、14%となった。スコア上で大きな変化がない、もしくは上がった学生は 80%以上であり、時間を経てもスコアが維持されている天から、継続学習が裏付けられた。学習時間の不足という改革前の課題が多少克服されたと見ることができる。ただし、前期に比べて、後期に 10 点以上スコアを落とす割合が増える（6%から 18%）ことも明らかになり、さらなる自主的学習の定着を促す方策が求められると言える。

課題 B（担当：渡部、ルプシャ、江村）では、まず第一に、平成 28 年 1 月および平成 29 年 2 月にそれぞれ実施された TOEIC L&R のスコアをもとに、旧カリと新カリそれぞれの 2 年次生の英語学力の比較を行った。その結果、旧カリでは、最多は 200 点台（平均 329.7 点）であったが、平成 29 年 2 月テストでは 300 点台（平均 355.2 点）となっていた。具体的な数値は割愛するが、200 点台の学生が減り、400 点台以上の学生が増えていること

から、カリキュラム改革の成果が一定程度見られているという結論を得た。第二に、e-learning 科目である「基礎演習 III, IV」については、担当教員によるきめ細やかな学習管理・指導により、平成 28 年度において、教材の平均消化率が 70%に到達しなかった受講者は、450 名以上の受講者のうち、前期は 3 名、後期は 2 名のみに残った。この結果から、「質の高い大量の教材を集中的に自学自習させることで、英語の学習法を習得させ、生涯にわたって英語に主体的に親しむ態度と技術を養う」という科目のねらいがほぼ達成できたと見ることができた。

課題 C（担当：佐々）については、「本学における米国語学研修の可能性を探る：オハイオ大学との交流を通して」『リベラル・アーツ 10 号』として、導入に至る経緯を詳細に報告しているため、是非そちらを参照されたい。

3 これまで得られた研究の成果

上記報告以外の研究成果は、以下に見ることができる。

- ・「岩手県立大学入学生の英語学習に関する諸問題—2014 年度入学生のケーススタディー」『リベラル・アーツ第 9 号』（執筆者：渡部芳栄、単著論文）

- ・「自立した英語学習者の育成を目指して：ぎゅっと e を活用した英語カリキュラムの改編」、第 1 回ぎゅっと e フォーラム、招待講演（発表者：高橋英也、2016 年 09 月 14 日、ホテル JAL シティ広島）

- ・「e-learning プログラムを用いた完全自学自習型科目「英語基礎演習 III, IV」：概要と今後の展望」、高等教育推進センター FD 活動報告会（発表者：江村健介、2016 年 12 月 16 日）

4 今後の具体的な展開

新カリが完成年度を迎えたばかりの現状では、その教育的効果について、検証作業を継続し、本学における英語教育のさらなる進展に資するデータの蓄積と提言を、引き続き行っていくことが求められることは、言うまでもない。当該カリキュラムの完成年度が研究実施最終年度と重なったことから、より詳細なデータをまとめた報告書は今後執筆する予定としている。